

全日本スキー連盟教育本部オフィシャルブックの分析

大 瀬 隆

1. はじめに

『2007年度（06-07シーズン）教育本部オフィシャルブック』に、以下のような指摘がある。⁽¹⁾

『スノースポーツへの参加人口の推移をサンプルにすると平成3年から4年のシーズンあたりをピークにして、この15年間でおよそ半減したと言われます。実質の人口は、それほど極端な減少はしていないと思いますが、参加回数は間違いなく減っていると言えるでしょう。』

そして、『教育本部は、この10年ほどの間にスノースポーツの環境を構成する「場」と「物」に関する団体と連携して、「活性化」に向けた活動を推進してきています。様々な施策を実施してきましたが、下方の安定期を迎えて、（中略）活性化の兆しが確認できる話題が増えてきている今、「サービス」の分野を担当する教育本部は、「何をすべきなのか」そして、「何ができるのか」を改めて検討し、具体的な活動の様式を時代に即したかたちに再編していかなければならないと考えます。』

また、『「何をすべきか」という観点では、中～長期的なビジョンとして明確に方向性を打ち出していかなければならないと思います。また、「何ができるか」という観点については、年度ごとに具体的なテーマとして、現場に提案していきたい』とし、『現場に立つ個々の指導者の方々が、対象者や環境に視線をやり、創意工夫して、沢山の指導プランを作り上げていくことが大切と考えます。』と、結んでいる。

ここで、筆者は、拙稿『カービング技術の指導系統』において、スキッディング・ブルーク（ハの字にこだわらないブルーク）との基礎技術の規定、及び屈脚・伸脚荷重によるターンコントロールを柱とした技術指導系統を報告したが、上記の指摘には、組織の立場からその活動の方向性を求めていく視点と、現場の指導者に求められる指導プランの創出との視点が伺える。よって、『日本スキー教程』が03年10月に改定（発刊）された後の「スキー指導者研修会の年次テーマ」を後者の視点から整理・検討し、筆者が提示した技術指導系統の吟味を深めようとするものである。⁽²⁾

2. 年度テーマの概括と特徴

ここでは、各年度の特徴点を挙げ、その内容を整理する。⁽³⁾

(1) 2003年度

スキー環境の急激な変化に対応する施策の一環として『日本スキー教程』の改定、分冊化の作業を推進してきたが、今年度はスキースポーツを活性化させる指導という観点から、「指導という商品」の開発を求めるテーマを設定した、とされる。そして、①理論テーマは、スキースポーツの商品開発（活性化）の研究・②実技テーマは、スキー指導の計画と実際（スキースポーツの商品化）、を挙げている。

1. スキースポーツの構造と過程

スキースポーツの目的を、「欲求充足（楽しさ）」とし、手段としての「技術上達」は、スキーヤーの「学習」により達成され、この学習を支援するのが、商品としての「指導」、としている。

2. スキー欲求の多様性

スキースポーツの商品開発における重要な視点は、スキーヤーの欲求とその多様性にあり、求める目的は画一的ではなく、商品における技術偏重は、手段の目的化を起こし、スキースポーツの活性化にとって障害となる、としている。

3. スキー技術の本質と種類

スキーの技術特性の本質は、「重力による落下運動」にあり、「商品開発における本質的技術理解」は「商品における技術偏重」とは明確に区別されるべきもの、とされる。そして、スキーの落下運動は、スキー板の縦軸の位置する雪面の斜度と、横軸と水平面の角度によって決定され、「水平面への角付け」の角度により、①山側（ターン内側）への落下運動によるもの、②縦軸方向のみの落下運動によるもの、③谷側（ターン外側）への落下運動によるもの、との三つの分類を挙げている。

4. ターン運動を構成する要素

1) スキーがターン内側へ移動する方法（トップ・コントロール、カービング）

- ①カービングによるスキーのターン運動は、スキーのトップがターン内側に彫り込まれるもので、「スキー角（スキーと最大傾斜線がつくる角度）が接線角（スキーの中心が通る円弧の接線と最大傾斜線がつくる角度）より小さい」ということは、より大きな彫り込みを含むターン運動である、とされる。
- ②カービングの舵とりは、水平面に対してターン内側へ角付けされ、ターン内側・前方への落下運動が維持されていることが絶対的条件、となる。
- ③カービングの切り換えは、ニュートラル・ポジション（ターン運動が生起しない）

を通過し、ニュートラル・ポジションまでの間に「ニュートラル・ゾーン（ターン運動を減少させる）」が生まれる、とされる。

2) スキーがターン外側へ移動する方法（テール・コントロール，スキッピング）

- ①スキッピングによるスキーのターン運動は、スキーのテールがターン外側に横づれするもので、スキー角が接線角より大きいということは、より大きな横づれを含むターン運動である、とされる。
- ②スキッピングの舵とりは、水平面に対してターン外側へ角付けされ、ターン外側・前方への落下運動が維持されていることが絶対条件、となる。
- ③スキッピングの切り換えは、その前半が舵通りの仕上げであり、後半が次の舵取りに必要なポジションづくり（実質的にターン運動はしていない）であり、切り換えの後半に「ニュートラル・ゾーン」が存在する、とする。

5. ターン運動の組み立て（商品開発）例

これまで、テールコントロールを中心にしたターン運動が組み立てられてきたが、今後の可能性として、トップコントロールを中心にしたターン運動の組み立てが指導の現場で求められている、としている。

03A：指摘されている「スキー環境の急激な変化に対応する施策」であるが、これは、前年度にも「(改訂, 分冊化の作業の推進にとまない) この3カ年は順次発行された『日本スキー教程』そのものの理解を目的にしたテーマを設定」してきたが、「(02年度は)⁽⁴⁾教程を実地指導でいかに活用するか」との観点から、「現場での指導に必要な技術全般に的をしぼったテーマの設定」との提起を受け継ぐものといえる。

03B：実技テーマの理解では、02年度では「ターン運動の段階区分」の視点から、その局面構造をより細分化して「ニュートラル・ポジション」を示していたが、「スキーがターン内側へ移動する方法・スキーがターン外側へ移動する方法」の視点からターン運動の構成要素を捉えて解説している。

03C：「カリキュラム作成の実際」での「トップコントロールを中心にしたターン運動の組み立て」の指摘は、02年度の「ターン技術の組み立てに必要な素材と組み立て例としての実用技術の構造を明確に理解することを目指す」との意を明示したものといえる。しかし、愛好者・スキー学習・ジュニア3級、2級検定の現場などでは、ニューコンセプトスキーとトラディショナルスキーとの混在が現況といえ、指導現場の状況把握が根底として求められよう。

(2) 2004年度

研修テーマⅠでは、『日本スキー教程 技術と指導』の理解と活用として、①「スキースポーツ」の理解・②「スキー技術」の理解と活用・③「スキー指導」の理解を、研修テーマⅡでは、新検定制度の理解と活用として、④スキー指導者検定の理解と活用・⑤スキーバジテ

ストの理解と活用・⑥検定、バジテストの運営について、を挙げている。

1. 「スキースポーツ」の理解

社会の変化が「断絶」的な中では、「パラダイム（考え方の枠組み）チェンジ」が求められ、その第1はスキースポーツの再考であり、それは「スキースポーツの目的は何か」を考えること（スキースポーツの本質的な楽しさ・魅力の理解）、として次のように目的と手段を示している。

上位目的：スキーの楽しさ→手段：技術

下位目的：技術習得→手段2：技術指導

2. 「スキー技術」の理解と活用

「パラダイムチェンジ」の第2はスキー技術の再考であり、それは「ターン運動の原因は何か」を考えること（重力による落下運動、それを導く身体運動の理解）、として3つの「コントロール」を次のように解説している。

スキーのターン運動では、まず自転運動（スキーが重心のまわりを回転すること）があり、これが向心力を誘発して公転運動（スキーが向きを変えないで円軌道上を移動すること）を誘い、両者の周期がかみ合ってターン運動が起こり、自転の規模で公転の規模が決まり、この自転の性格と規模を規定するのは、荷重と（水平面への）角付け、とされる。

つまり、ターン運動の原因としてのメカニズム3態は、自転のつくり方の違いといえ、「テールコントロール」はテールのターン外側への横ずれによるもの（横ずれ・大）、「トップ&テールコントロール」はトップのターン内側への横ずれによるもの（横ずれ・小）とテールのターン外側への横ずれによるもの（横ずれ・小）、「トップコントロール」はトップのターン内側への彫り込みによるもの（彫り込み・大）、となる。

3. 「スキー指導」の理解

「パラダイムチェンジ」の第3はスキー指導の再考であり、それは「何を教えるのか」を考えること（多様なスキーヤーの欲求を充足させる指導の理解）であり、そこに新たな指導方法（の構築）、新たなビジネスチャンスの可能性が（潜む）、としている。

04A：「スキー技術の再考」は、前記の03B・Cの内容であり、「コントロール3態」を「自転運動・公転運動」の視点から表したものと見える。

また、自転・公転運動の考え方は、根源的に、木下・穂坂らの知見に見られ⁽⁵⁾、現在のニューコンセプトスキーの機能に対応させたものと見える。

04B：この年度では、「03の商品化」の継承が明確ではない。しかし、それはこのシーズンから実施される「新検定制度」に特化されているとの見方ができる。その特筆点は、従来の「基礎」との用語を用いない改定にあるといえ、「基礎スキー」との特殊分野を想定させる表現からの脱却を図ったものと見える。

(3) 2005年度

実地の指導活動をどのように運営したらよいかという観点から、主に指導法に力点をおいたテーマを設定し、研修テーマaは、「受講対象者への各フィールドにおける指導法の工夫」として、①対象別指導の要点・②指向別指導の要点を、研修テーマbは、「技術指導の進め方」として、①技術課題の理解・②指導過程の確認を、研修テーマcは、「検定種目の確認」として、①技術要領の理解・②技術評価の要点、を示している。

1. 受講対象者への各フィールドにおける指導法の工夫

スキースポーツの多様な展開と指導者の資質という観点から、最近の指導対象者の年代構成や指向の多様化に具体的に対応する活動を立ち上げていくことを意識している。また、環境面では、テレマークの団体や自然体験学習の団体とのジョイント、さらには、チルドレン対策としての素材発掘、入門層の開拓、中高年対策、フリースタイルへの対応、バックカントリーや山岳スキーにおける指導と安全対策等々、指導者が担当するフィールドは著しく拡大している、としている。

2. 技術課題の理解・指導過程の確認

スキーの科学的知見は、スキーのターン運動が外側から観察され、客観的分析を基に言語や数値で表現され、真実のターン運動のメカニズムを明らかにする。一方、スキーヤーは、自己の内側の感覚・イメージなどによって主観的に運動を実践する。この「客観的・外観的世界と主観的・内観的世界は、互いに異なる二つの別々の世界を形成」しており、スキー技術の新しいパラダイムがスキーヤーの滑走感覚として理解されるためには、この二つの世界のずれ（壁）が認識され、これらを互いにどう結びつけるかが検討されなければならない、として次のように示している。

〈1〉スキーのターン運動を導き出すスキーヤーの身体的運動の理解

1) 抜重・回旋

* 中心軸運動感覚：脚部主体の筋力重視の運動

* 外スキー主導

2) 荷重・角付け（外）：水平面よりターン外側への角付け

* 「中心軸運動感覚」から「2軸運動感覚」へ

* 「外スキー主導」から「両スキー主導」へ

3) 荷重・角付け（内）：水平面よりターン内側への角付け

* 2軸運動感覚：体幹部主体の重力重視の運動

* 内スキー主導

〈2〉3つのコントロールのメカニズムと展開

1) テールコントロール

* 中心軸運動感覚・外スキー主導

2) トップ&テールコントロール

* 2軸運動感覚・外スキー主導 (=両スキー主導)

3) トップコントロール

* 2軸運動感覚・内スキー主導

〈3〉指導過程の確認

1) 中心軸運動感覚と外スキー主導の指導

2) 中心軸運動感覚から2軸運動感覚への指導

3) 2軸運動感覚と内スキー主導の指導

05A: 「03の商品化」, すなわち「実地指導の運営」の明示がみられる。それは、「最近の指導対象者の年代構成や指向の多様化」との意を反映するものといえる。

05B: [別添資料表]において、ジュニアの総数では(減少傾向ではあるが)特筆的な事象が見られず、減少傾向は青・成年層の指向の多様化が進んだものといえ、検定制度がもつ意味(意義)の理解に、社会的な認識との乖離があるものと推測できる。

05C: 「客観的・外観的世界と主観的・内観的世界」との表現で示されている点は、03年度からの継続的な掘り下げを求めたものといえ、「中心軸運動感覚・2軸運動感覚」との技術用語で表している。それは、「指導過程」での3系統のプログラムで、2軸運動感覚をより重視した技術指導の方向性を示していることにも反映されている。

05D: 「検定種目の確認」では、「これまでは、基礎スキーという枠組みの中でアルペンスキーの一分野の普及振興を担当してきている」が、これからは「培った指導力を基盤にして専門性を付加していくことが求められる」とし、前シーズンでの理解不足を解消すべく、その視点を示している。

(4) 2006年度

研修テーマⅠは、「スキースポーツ振興の方向性と指導者の役割を理解する」として、①スキースポーツ振興の方向性・②指導者の役割を、研修テーマⅡは、「技術指導の進め方」として、①技術指導の段階と課題・②基本技術の構成・③発展技術の構成を、研修テーマⅢは、「技術評価の要点」として、①指導者検定の種目の理解・②運動内容評価の要点、を提示している。

そして、ここに掲げた項目は、「前年度からテーマ設定のねらいとするところに大きな変化」はなく、今年度は指導環境の変化に対応するため、理論テーマに「振興策の方向性と指導者の役割を確認する」との項目を設定した、とされる。

1. スキースポーツ振興の方向性

振興の理念としては、大衆のスポーツへの多様な関わり方とスポーツと日常生活の接点を探ることから、生涯スポーツ社会を形成していくことが目標となる。それは、限られた

人のための能力指向のスキーだけでなく、年代別、指向別に多様な参加を受け入れ、スキー文化を共有するコミュニティの実現に向けて、社会の要請に応えることのできる指導力を備えた「指導者づくり」が必要かつ重要課題となる、としている。

そして、かつてのブームの時代を築き上げた技術指向の傾向は若年層から成年層へと移り、志向面でも健康・文化志向へと拡がりを見せ、スキーの延べ人口は、最盛期の60%くらいまで減少したといわれるが、一方では、本格的な目的である「楽しむ」というところにスキースポーツの真価を見出す人が増えてきている、とし課題を挙げている。

課題は、参加人口の構成を如何に「安定型」にするかということであり、かつてのピラミッド型からブーム時代にピア樽型に移行し、現在は逆ピラミッド型といわれているが、このような傾向に対して、第一には、将来につながる新しいスキーヤーづくり、第二には、参加者をサポートするシステムや場の整備が必要であり、特にキッズやチルドレンへのスキーへの誘い・中高年からでも参加できることへの啓蒙活動・志向や適正を考えた多様な遊び方への誘いも大切である、としている。

2. 指導者の役割

指導者には、スキーを文化として定着させていく役割があり、そのためには、これまでの技術・戦術に関する指導への偏りを修正し、スキーの行い方や取り組み方、マナーやエチケットなどの道徳的な規範を自ら遵守し指導することが重要となる、として次の点を挙げている。

スキーに参加する人々の様々なニーズやスキーライフを構築する方法を教え、サポートしていくこと、また現場で最も重要なことは指導の対象とのコミュニケーションを図ること、その相互信頼を築くにはスポーツ医・科学に裏付けられた知識とコミュニケーションスキルを身に付けることが大切といえる。

3. 技術指導の進め方

1) 技術指導の段階と課題

現教程では、指導系統を「基本技術を構成する過程」と「多様なスキー分野へと発展する過程」の二つの段階に区分し、指導過程の全体としては、基礎課程・応用過程・発展過程の三段階に区分し、基礎過程は、導入と組み立ての各段階に細分している、とされる。

そして、基礎過程から応用過程に至る過程のなかで必要とされる身体の使い方やスキー操作の内容が、課題として挙げられる、としている。

2) 基本技術の構成

導入の段階では、主要な目標である「ターンの組み立て」のベースになる「動作・操作」を、組み立て段階は、ターン運動の主導性を中心的に扱い、それぞれの原則的な身体の使い方と質的な変化による運動形態の変化を確認していく。そのなかで、ターンの

始動と舵とり部分での「荷重の意識」を課題として加え、プログラムの展開では、構造の違いから区分している技術の系統を別々に進むのではなく各系統のつながりを求めて進む設定にしており、それは「構造の違い」を知ること以上に「構造変化の原因」を理解することにあたる、としている。

この点では、以下の要旨が特筆できる。

パラレルターンの段階では、スキー操作（ターン運動）の主導性の意識を「外・内」と限定することで、実用性のない滑り方になってしまうことがある。外スキー操作を中心にした身体の使い方を身に付けた段階から、内スキー操作を加え、縦方向への移動へと変化させていく段階になると、パラレルターンの実現には必然的に「内スキー主導の要素」が必要となる。スキーの動きを内外とも「横滑り要素」から「たて滑り要素」へと質的な変化をさせることで、この必然性が理解される。

よって、今回のテーマのなかでは、基本的なパラレルターンを「内スキー主導」の系統に位置づけている。ただし、ここでの「内スキー主導」は、カービングターンではなく、あくまでも、ターンをリードする操作の主体を意味し、内スキー主導の意味合いを幅広く解釈し、外スキーを縦方向に移動させる操作と結びつけて取り扱うことになる。全体的な観点としては、身体の使い方には中心軸感覚のかたちと二軸感覚のかちがあり、課題としては、中心軸感覚の動きが二軸感覚の動きに変わっていくところがポイントになる、とされる。

3) 発展技術の構成

一般的な指向は、技術習得を目的とする活動から徐々に技術を手段として実践を楽しむことを目的にする活動へと変わっていく傾向を見せている。こうした状況に対し、大衆を対象とする指導の現場では、従来の「基礎スキー」の範疇に留まらず、広く指導の分野を扱っていかなければならない、としている。

06A：「スキースポーツ振興の方向性」は、「05にも同様」の内容が示され、また「スキーの延べ人口は、最盛期の60%くらいまで減少した」との点に関しては、『教程』で「スキー人口と参加パターン」として記されており⁽⁶⁾、ここでは、卑近な例を付記する。⁽⁷⁾

06B：「指導者の役割」では、「スポーツ医・科学に裏付けられた知識」との一步踏み込んだ指摘がある。

06C：「技術指導の進め方」では、「04からの継続的な掘り下げ」が見られ、それは、「トップコントロールによるターンの組み立ての研究」は継続され、今回は「二軸感覚の動きでスキーのたて滑りも横滑りもコントロールできるのではないか」との検討を行い、「将来の方法論のベースを整えることも必要」と顕著である。

06D：パラレルターンの段階（位置づけ）でポイント（課題）としている「中心軸感覚の動きが二軸感覚の動きに変わっていくところ」との指摘は、質的な順序性が問われている点であ

り、その質が中心軸感覚を身に付ける過程に包含されているかが、課題として重要と考えられる。

06E：「発展技術の構成」は、「05と同様」の内容といえる。

3. 課題の所在

ここでは、前項での小括に、「07年度テーマ」の整理を付して比較・検討する。

(1) 03A～06Eの検討〈その1〉

各年度のテーマ構成は、「スキー環境の急激な変化に対応する」との観点が根底にある。その大きな施策の一つが、『日本スキー教程』の改定・分冊化であり、それを受け、03年度では「指導という商品の開発」との方向性が示された。しかし、その「商品開発（活性化）」は、04年度では不鮮明であり、05年度に「実地指導の運営」との視点から明示され、06年度の「スキースポーツ振興の方向性」として継承され、07年度も同様な指摘がなされている。

また、04年度から実施された「新検定制度の理解」・「検定種目の理解」も大きな施策であり、07年度まで継続的に指摘がなされている。

しかし、本論では、「スキースポーツの振興」・「指導者の役割」・「指導者検定」などを論ずることが本旨ではなく、河西や最近の報道を例に挙げるに留める。⁽⁸⁾

(2) 03A～06Eの検討〈その2〉

検討〈その1〉の方向性を実質的に支えるものが、継続的に構成されてきている「技術指導の進め方」といえる。そこに示される「技術指導課題と段階」は、『日本スキー教程』の本質であり、とくに05年度からは「中心軸運動感覚・2軸運動感覚」との技術用語で解説されている。

その継続は07年度にも見られ、テーマの方向性と構成は基本的に変わらないが、技術的な「研究課題」は「二軸の運動についての理解を深める」ということに絞った、として以下のように示されている。⁽⁹⁾

まず、「二軸の運動」というと、これまでの経験から「トップコントロールの技術」とか「カービングターン」を意識しがちだが、そうした先鋭的な技術のみを意識した「二軸の運動」の取り扱いではない、こと。「カービング軸＝二軸」という固定的な概念を修正し、あらためて「二軸の運動」の特徴や優位性を考えて、一般的なスキーヤーの基盤の技術として取り入れ、その優位性は安全面と効率性から、スキーヤーに負荷の少ない運動になる、とされる。

そして、求めていく運動の内容としてポイントになるのは、「滑って移動していく」な

かで「スキーを滑らせていくエッジングをする」ということで、スキーがずれていても、切れていても、「ターン方向に動きを続ける」ことが大切であり、この「動きのあるエッジング」は、両足で立ち、左右のスキーに荷重配分がなされることによって可能になる、としている。

これらは、「ターンをするのに必要な力感」と「バランスを取るのに必要な力感」とを区分して感じ取れるようになること、また、「ターンを生起する始動期の感覚」と「ターン方向を決める仕上げ期の感覚」も区分して考えなければならず、課題のまとめとしては、「ターンのしぐみ」を考える観点として、ターン運動のなりたちを「雪面抵抗」でとらえていくか、「向心力」でとらえていくかを区別し、落下していく位置エネルギーを運動エネルギーに変える技術として、「移動する力に制動をかける運動」と「移動する力に方向性を与える運動」のふたつがあり、今回のテーマでは、「後者についての研究」を提案している、とされる。

さらに、「技術指導の段階」では、前年度の「指導の展開の体系」から、「中心軸運動感覚」の系統を取り除き、「二軸運動感覚」の系統を中心的に扱う、として要点を示している。

- 1) 運動形態にとらわれず、一貫する「身体の使い方」の学習を順序立てている。
- 2) 目標をパラレルターンに設定し、その形態の組み立て過程を「基本技術の構成」としている。

(3) 仮 説

〈検討その2〉に示した、「二軸の運動」・「スキーを滑らせていくエッジング」・「雪面抵抗と向心力」・「移動する力に方向性を与える運動」等は、『日本スキー教程 指導理論編』でも明らかなように、バイオメカニクスを核とする考察といえ、筆者が『拙稿』で用いた「スキッピングブルーク」・「伸展荷重と屈曲荷重」・「ターン形成での加重制御」等は、モルフォロジー的考察に立脚するものである。⁽¹⁰⁾

よって、それぞれの考察の互換性を深めることは重要であり、そこに本旨の目的がある。そして、『拙稿』は、「スキーをまわす原動力は荷重移動であり、後には圧力移動となる。これは横方向、上下方向、あるいは前後方向に作用する。それが大きすぎると、スキーをまわす力は強くなるが、バランスを乱す要因となる。よって、荷重移動は、バランス面から限界がある⁽¹¹⁾」との知見を重視して系統を構築しており、加えて注目しているのは、「タヒチアンダンス」の身体運動経過、特に「両脚のモルフォロジー」であり、その分析が「加重制御の反復・洗練化」に繋がるものと考えている。⁽¹²⁾

以下に、幾つかの視点を定め、今後の検討に付したい。

○「タヒチアンダンス」にみられる両脚の運動経過とスキー技術用語との接点。

- ・「外脚・内脚」、「外腰・内腰」、「股関節」

- ・「屈曲・伸展」, 「外旋・内旋」, 「外転・内転」

- 1980年代半ば（から）に注目された「フリースキーイング」において、海和俊宏の「骨で滑る・谷腰が中心」との感覚的示唆（スキージャーナル1984. 8）と「二軸運動感覚」の対比。
- マイネルの「学習の位相」と互換する新オーストリアスキー教程の「粗形態・精形態」, 「粗協調・精協調」の過程と「トップコントロールによるターンの組み立て」の方向性との対比。
- 本旨では直接的に触れていないが、ジュニアテストの採点基準と実施指導内容の整合性。

《注》

- (1) 全日本スキー連盟：教育本部オフィシャルブック2007年度版，北海道スキー連盟教育本部メモ，スキージャーナル社，2006，p229
- (2) カービング技術の指導系統，札幌学院大学人文学会紀要第72号，2002，p1-16
- (3) 『教育本部オフィシャルブック』は『日本スキー教程』（全日本スキー連盟刊行）の理解と共有化を狙い，1999年より年次重要情報を記載・発刊しており，2002年度からはその充実がさらに顕著である。
 - 2003年度版 北海道スキー連盟教育本部メモ，p194-201
 - 2004年度版 北海道スキー連盟教育本部メモ，p196-205
 - 2005年度版 北海道スキー連盟教育本部メモ，p196-204
 - 2006年度版 北海道スキー連盟教育本部メモ，p234-241
- (4) 2002年度版 北海道スキー連盟教育本部メモ，p192-195
- (5) 木下是雄・穂坂直弘，日立製作所，1972，p154-165・169-179
- (6) 日本スキー教程指導理論編，スキージャーナル社，2000，p26-28
- (7) 以下のものを例示する。
 - ①「学校の教材に役立つ大図解」として，次のように掲載されている。

全国的なスキーブームが，1980年代後半に到来。（中略）しかし，91年のバブル崩壊と同時にスキー人気も下降に転じ，91/92シーズンに9千万人だった道内スキー場のリフトやゴンドラの利用者数は，昨年度シーズンに5千万人まで減少。営業を縮小や停止したスキー場も多い。スキー離れの背景には，用具やリフト代に費用がかかることや，10代や20代のレジャー嗜好の変化などが挙げられる。学校でのスキー学習の時間も減り，スキーに触れる機会が減っている。（北海道新聞，2007年1月27日，週刊別冊）
 - ②札幌市のスポーツについての市民意識調査結果について，同市の市スポーツ振興審議会での報告内容として，次のように掲載されている。

冬のスポーツの不振について，審議会委員の篠原浩暉・前市中体連会長は「市内の中学校でスキー授業をしているのは三割。子どものうちにスキーをしないと大人になってもしない」と指摘。市は，「今後，中学校へのスキー授業への講師派遣を増やしたい」と答えた。（北海道新聞，2007年5月25日朝刊）
- (8) 河西邦人，公営スキー場の経営再生ーびっぶスキー場を事例にー，札幌学院大学商経論集第23巻第1号，2006，p125-170

また，以下のものを付記する。

 - ①「狙いは家族連れ」として，北海道内のスキー場（朝里川温泉・マウントレースイ・アルファリゾートトマム・さっぽろばんけい）の集客の方策を掲載している。（北海道新聞，2007年2月6日朝刊）
 - ②スキー，スノーボードの世界的ガイドブック「ワールド・スノーボード・ガイド（WSG）」が，5月からウェブサイトの「電子版」で北海道のスキー場特集を始めたとの内容で，次のように掲載されている。

「（WSG社のスタブス記者は）私たちが求めるのはスタッフの英語力よりも良質の雪を自由に楽しめる環境です。北海道のスキー場は管理が行き届いてすばらしいが，決められたコース以外でも，スキーヤーの自己責任で滑る自由を認めてほしい。それが可能なら欧米からの来訪がさらに増えるはず」とアドバイスする。（北海道新聞，2007年5月30日朝刊）

- (9) (1)の前掲書, p237-239
 また、本論での「二軸」の表記では、「2と2」が使用されているが、「資料原文」で用いている。
- (10) クルト・マイネル, スポーツ運動学, 大修館, 1981. p119
 「スポーツの諸技術さえも、たえざる変容のなかにおいて理解される。それゆえに、運動の諸認識や諸判断がスポーツ運動系のたえざる発展と分化に適合していこうとするなら、それらも変化し、深化させられなければならないであろう。可能な限りの多角的考察が要求されるほかに、また考察法をたえず発展させるように要求を上げてゆくことになる。」
- (11) フランツ・ポピヒラー, 新オーストリア教程, スキージャーナル社, 1996, p20
- (12) 世界のダンス, ジェラルド・ジョナス著, 田中祥子・山口順子訳, 大修館書店, 2000, p19・110
 ・「女性は膝を折り, 足裏のボール部分に体重を乗せて腰をすばやく旋回させる。男女とも頭部はまっすぐに保ち, 腕はほとんど動かさず, 骨盤を前に突き出すという腰から下の動きが主である。」
 ・「クック諸島の女性はいかに活発に腰を左右に揺らそうとも, 骨盤は決して旋回させず, 肩も動かさない。」

〔別添資料表〕年度別：北海道スキー連盟公認スキー学校級別テスト・ジュニアテスト結果一覧

級別	1級 男	1級 女	2級 男	2級 女	3級 男	3級 女	計 男	計 女
1999年度	620	252	937	484	738	416	2756	1467
2000年度	806	375	848	495	779	579	2907	1924
2001年度	696	322	756	404	767	531	2567	1614
2002年度	707	263	723	437	899	594	2774	1525
2003年度	759	285	741	436	902	613	2857	1563
2004年度	534	195	822	378	959	598	2779	1465
2005年度	564	229	973	445	926	650	2965	1560
2006年度	484	212	876	401	882	682	2805	1544
ジュニア	1級 男	1級 女	2級 男	2級 女	3級 男	3級 女	計 男	計 女
1999年度	659	250	1239	595	2129	1183	9612	6105
2000年度	708	287	1297	690	1914	1238	9162	6628
2001年度	895	390	1472	789	1921	1186	9149	6380
2002年度	975	438	1418	753	2101	1372	10075	7188
2003年度	962	464	1563	884	2128	1418	10314	7291
2004年度	896	406	1307	855	1826	1254	7974	5535
2005年度	988	548	1425	885	1989	1417	9989	7142
2006年度	943	520	1469	953	2039	1467	9826	7356

*各年度の北海道スキー連盟教育本部メモより作表：「計」の値には下位級をも含む

(おおせ たかし 本学人文学部教授 体育方法専攻)